

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長 殿

授業担当者

所属/職名: 国際島嶼教育研究センター・准教

氏名: 山本宗立

授業科目名	太平洋島嶼学特論
研修先(国・地域) 滞在地	ミクロネシア連邦・グアム
研修期間	平成26年9月7日～9月13日
<p>〔研修の成果〕</p> <p>ミクロネシア連邦チューク州ウエノ島ではTrukstop Hotel Operation Manager のMason Fritz氏およびチュークで観光業を営む末永卓幸氏にチュークの文化や歴史、観光についてご講義いただいた。地元市場を訪れて地場産の作物や魚介類を学ぶとともに、近代的な設備を持つスーパーマーケットでは多種多様な輸入食品が多量に販売されていることを知り、MIRAB経済の構造を理解した。ピス島では伝統的な食事(パンノキ、芋類、バナナ、ココヤシ、魚介類)を島人と共食するとともに、実際に魚介類の捕獲・採集を体験した。電気・ガス・水道のない小さな島で、半自給的生活を経験し、現代人が忘れてかけている「生きるとは何か」について再考・熟考する機会を得た。人が「豊かな」暮らしを持続的に実現するために必要な、自然生態的基盤、政治経済的基盤、社会文化的基盤について理解を深めた。</p> <p>グアム島ではイナハラン・チャモロ文化村を訪れて、グアムの先住民であるチャモロの文化を学んだ。グアム島の南部を半周し、グアムの自然(植物・動物・地形など)や歴史(特に第二次世界大戦時の遺跡や博物館において)を学んだ。大学間交流協定のあるグアム大学を訪れ、教育学部のYukiko 学生と活発な議論をおこなっていただいた。また、ピス出身で現在グアム島に住んでいる家族を訪れ、就労・教育機会等を求めてミクロネシア連邦からグアム島に移住した人々の生活を観察するとともにMIRAB経済の構造を再度理解した。</p> <p>すべての学生が非常に意欲的な学習姿勢だったことは、特筆すべき点である。</p>	
<p>〔今後の課題〕</p> <p>研修後に開催した学生との討論会から、①『ミクロネシアを知るための58章』を事前に必読すること、②チューク語の簡単な挨拶の講義を開催、③できるかぎり「島嶼学概論I」「島嶼学概論II」の受講をすすめる、の3点が課題として浮かびあがった。来年度に生かしたいと思う。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属: 水産学研究科1年

氏名: 西村祐星

授業科目名	「太平洋島嶼学特論」
研修先(国・地域) 滞在地	ミクロネシア連邦・グアム
研修期間	平成25年9月16日 ~ 9月23日
〔研修を通じて得た成果〕 ミクロネシアチューク州の島嶼における現地の生活習慣、文化、風習という文献や講義の上でしか知ることの出来ない多くの事実や知識について、体験学習という形で実際に学ぶことができた。 加工産業が未発達である太平洋の島嶼において、アメリカや中国、東南アジアからの加工食品の輸入が現地の人々の生活の上で不可欠という現状を知り、食品加工技術の重要性について学ぶことができた。 グアム大学教育学部のスミス・イノウエ教授との対談では、日本人の海外活動の活発化に不可欠であるはずの英語力の乏しさや、日本人女性の社会進出の低さとそれを支える男性の理解の低さなどの我々に課せられた大きな課題の他、近くの島嶼からの人口の流入による社会保障の負担の増大などグアム特有の問題について学んだ。 チャモロ文化村のチャモロ民族の伝統的な生活の体験学習においては、伝統文化の保存の重要性とそれがいかに困難で工夫が必要であるかを学んだ。 島嶼における開発支援、技術の提供などの援助においては、その提供したモノの維持が不可欠であり、それが出来ないと、廃墟と化した製氷施設のように役に立たない無用の産物と化してしまうという開発援助の今後の課題について学んだ。	
〔研修後の抱負〕 我々、現代人は当たり前のようにスーパーやコンビニで加工食品を買い、当たり前のように電気の明かりのついた部屋で暮らしている。その状況とは真逆の島での生活をする事により、現代の生活のありがたさを体験するのが本講義の目的であったが、私はその不自由さを楽しむ精神的な余裕を身に着けることができたと思う。今後は不自由さを楽しむことで、多くな困難を乗り越えていきたいと思う。	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属: 人文社会科学研究科修士2年

氏名: 宋 多情

授業科目名	「太平洋島嶼学特論」
研修先(国・地域) 滞在地	ミクロネシア連邦・グアム
研修期間	平成25年9月7日 ~ 9月13日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p><ピス島>まず、グアムからトランジットでミクロネシア連邦チューク州ウェノ島へ到着し、翌朝、モーターボートで一時間ぐらい掛かるところに位置しているピス島に移動した。この島には、電気・ガス・水道がない。雨水をタンクに集めて料理に使い、井戸水を利用して体を洗う、トイレは海水を汲んで来て流す形になっている。また、ソーラーパネルで電気を得ることができ、一部であるが、夜に電灯をつけたり、音楽を聴いたりしていた。主食は魚で、食事には白いごはん、魚をココナッツミルクで煮込んだものや鶏肉の料理、魚の缶詰めとキムチを入れたラーメンなどが出た。2泊3日間の短い滞在だったが、普段の生活で当たり前のように思っていた部分について改めて考えてみる事ができた。</p> <p><ウェノ島>1. 道路問題: ウェノ島の道は未舗装道路が多く、以前に舗装された道が破損し、あちこちに水溜りが多かった。舗装された道もあるが、一部に過ぎないので、車の運転がたいへんで、タイヤがパンクすることもある。日本から中古車が輸入され、車両の大半は日本製が多い。ナンバーがついてない車も普通に見られる。運転免許が無くても運転できるし、シートベルトもほとんどしない。</p> <p>2. ゴミ問題: 道には普通にゴミが捨てられていて、そのまま放置されている場合が多い。特に、港にゴミが多い。港のすぐ前の海はゴミが浮遊しており、水が汚れているが、ゴミがあるにも関わらずきれいな自然を保っている。まだ環境への負荷が小さいから維持されているのかも知れないが、将来的には環境保全のために対策を考える必要があると思われる。現在、日本外交協会が「リサイクル援助事業」を実施し、その成果も出ているのでそれが持続されることを期待している。</p> <p>3. 観光について: チューク国際空港の2階にある観光局を訪ねたが、誰もいなかった。また、その様子から現在はあまり機能していないのではないかと思われた。そして、おみやげから現地の人々が何を観光資源として見ているのか確認することを目的に、我々が泊まっていたTruk Stop Hotelとチュークの高級リゾートホテルBlue Lagoon Resortを訪問した。さらに、去年まで観光局で勤めていたMason FritzさんとTruk Ocean Serviceの末永卓幸さんにインタビューを行い、チュークの観光についてある程度分かるようになった。</p> <p><グアム>グアムでは、チャモロ文化村及び観光スポットを回り、グアム大学ではInoue先生にグアムとミクロネシアの教育についてお話を聞くことができた。ミクロネシアとは様々な面で違いを感じる事ができた。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>今回の研修でもっとも大変だったのは、やはり英語によるコミュニケーションだった。グアムでは観光客が多いため、日本語や韓国語でもある程度対応できた。しかし、ミクロネシアでの調査やインタビューを行う時には英語ができなくてけっこう苦労した。英語は無理だと決めつけて、自分の力で頑張らずに先生に頼ってしまったことを反省し、もっと英語及びコミュニケーションのスキルをアップさせたいと思った。また、この研修をきっかけにミクロネシアにすごく興味を持つようになったので、今後また訪問し、研究を行いたいと思っている。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属: 理工学研究科2年

氏名: 坂口 建

授業科目名	「太平洋島嶼学特論」
研修先(国・地域) 滞在地	ミクロネシア連邦・グアム
研修期間	平成25年9月16日 ~ 9月23日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>研修を通じて、自分の英語の拙さを感じた。これまで英語を学問の一環としてしか見ていなかったが、そうではなくコミュニケーションのツールとしての英語という見方を今回の研修で学んだ。また、ミクロネシア連邦のピス島で生活をしてみて、日本とは異なった文明文化を体験することができた。夜になったら街灯がなく真っ暗で、テレビもなく、お風呂は井戸水で水浴びと、足るを知る、とても貴重な体験をすることができた。そんな島に住んでいる現地の人や子どもと接したが、元気いっぱい日本の子どもよりも幸せそうに見えた。日中は外や海で遊び、暗くなると家に帰り、ご飯を食べ寝る。そんな生活を見て、また自身で体験してみて、このような生活が人間の本質なのではないかと感じた。ウェノ島では市場に行き、どんな果実や商品が売られているのか見て回った。その中には南西諸島にもあるバナナなど、日本にもあるものも売られていたが、全く見たことのないような果物も売っていて新鮮に感じた。グアムでは、先に述べたミクロネシア連邦とは異なり、街中に日本語が多くてびっくりした。観光客に日本人が多いことからか、お店の人も日本語、街行く人のほとんどが日本人ということで、英語を話す機会がミクロネシアに比べてあまりなかった。そしてグアム大学では日本人の方が働いているということでお話を伺った。そこでグアムの国柄や日本人に対してどう思っているか、教育現場の現状などを聞くことができた。グアムは周辺に島々が多くあるが、先生が島になかなか行かず、地域によつての学力格差も大きいという話には私は衝撃を受けた。</p> <p>また今回の研修を通じて、現在私が修士論文で研究を行っているゴカイなる生き物も観察できたのは、大きな成果だ。グアムはともかく、ミクロネシア連邦のような地でゴカイの研究は行われていないので、今回の観察はとても重要なものとなるだろう。以上のことを踏まえて、ミクロネシア連邦とグアムへの本研修は私自身にとって大変貴重な体験になったと思う。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>研修を通じて感じた自身の英語力の無さを改善したいと思う。単語でも伝わることがわかったので、単語と文法の勉強を、学問としてでなくコミュニケーション能力の向上を目的に励んでいきたいと考えている。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属: 理工学研究科・2年

氏名: 西條 喜来

授業科目名	「太平洋島嶼学特論」
研修先(国・地域) 滞在地	ミクロネシア連邦・グアム
研修期間	平成26年9月7日 ~ 9月13日
<p>〔研修を通じて得た成果〕 ミクロネシア連邦チューク州ピス島での自給的生活は、利便性を求め続ける日本での生活とは大きく異なり、これまでの自身の生き方を見直すきっかけとなった。実際に貯水タンクの水を飲み井戸で体を洗うことにより雨水の大切さを感じ、近海で獲れる魚介類の捕獲と調理、家畜としての犬の調理と食を通して生物を食することの本質を考えさせられた。電気・ガス・水道がない中、“豊かな”生活とは何かを自問自答した。ピス島では男性が海に入り魚介類を獲り犬を捌き、女性が調理を行い食事の準備をするというように男女の役割が明確に決められており、男女が一緒に過ごす場面はあまり見られなかった。懸命にやせようと努力する日本の女性と違い、女性はふくよかなほど良く、富の象徴と考えられていることに驚いた。ウエノ島では整備されぬままの道路や地元の農作物と輸入品の両方を扱う商店、散策時に見た学校や教会から人々の暮らしぶりを垣間見ることができた。昆虫生態学を専攻する私は、ウエノ島、ピス島、そして無人島であるエバリット島の3島にてハチ目アリ科昆虫を地表、樹上、砂浜の地点に分けて観察した。修士研究とは直接的な関係はないが、今回の調査がこの周辺地域からの最新の報告になることは間違いない。グアムではチャモロ文化村での研修や、グアム大学での講義、周辺観光が主な活動であった。グアムの都市部では日本語で書かれた看板が多く、観光業が盛んなグアムに訪れる8割が日本人観光客だが、戦時中の日本統治経験から反日感情を持つ人も多い。日本人は自国の歴史を学ぶに留まらず、ミクロネシア連邦やグアムに限らず統治した国や地域の歴史を学ぶ必要があると感じた。グアムの先住民であるチャモロの人々は政治、経済、教育など多くの面で今でもの権力が強いという。ミクロネシア連邦や中国、韓国からの移住者が増える中での今後のグアムの動向に非常に興味を持った。鹿児島県は日本でも多くの有人島を持つ。医療や交通食糧面や高齢化など同じ課題を抱える地域も多い。これらの問題解決のためには、日本の島々だけではなく世界の島々の暮らしの問題点、相違点に目を向ける必要性があると感じた。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕ミクロネシア連邦やグアムでの研修中には、現地の人々とのコミュニケーションや買い物の場面で心残りの場面が多くある。英会話能力不足が原因である。論文を読み込むだけでは語学力は上がらないことを痛感したため、日常生活でも英語に触れることを心がけ、常に視野を世界まで広げる努力を行う。鹿児島県の島々にも今以上に目を向け、島固有の伝統や文化、歴史を積極的に学びたいと考える。今回の研修で感じた、「豊かな」生活とは何かという疑問を近代化が進む日本で持ち続け、今後の生活に生かしていきたい。</p>	

学生海外研修報告書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所属: 農学研究科修士2年

氏名: 大場 賢

授業科目名	「太平洋島嶼学特論」
研修先(国・地域) 滞在地	ミクロネシア連邦・グアム
研修期間	平成25年9月7日 ~ 9月13日
<p>〔研修を通じて得た成果〕</p> <p>私は、今回の研修で、ミクロネシア連邦チューク州、ピス島およびグアムを訪れた。初めての海外ということもあり、全ての経験が新鮮で、自分自身を成長させてくれた。まず、ミクロネシア連邦チューク州ピス島では、現地の方々と2泊3日の間、生活を共にすることで日本との違いを知ることが出来た。日本でライフラインと言われているエネルギー資源および水供給施設は整っておらず、ガスおよび電気はなく、ガスポンペの使用やジェネレーターによる発電を行い、水供給施設は汲み取り式の井戸水および飲用水は雨水であり水道はない。このような状況では、日本で生活することは困難であると考えられる。しなしながら現地ではその中で、日々の生活を送り、満足はしていないかもしれないが、笑顔があふれる中で生活していると私は感じた。これらのことをふまえると、私たちはこれらの生活を変えようと思うのではなく、人が笑顔で生活するための価値観が異なることを理解することが重要であることが出来た。</p> <p>グアムではチャモロヴィレッジおよびグアム大学を訪れた。チャモロヴィレッジでは塩を作っている様子を見学することや、ハイビスカスやココナッツなど植物の葉を利用したうちわや帽子などの制作方法などを学習することができた。また、建物などからもチャモロの生活や文化を学ぶことができた。</p> <p>次にグアム大学でイノウエ スミス ユキコ先生にお話を聞く中でグアムの現状を知ることが出来た。グアム大学では大学の教職員の採用や重要な役職などは先住民であるチャモロ人が優先であり、学長や学部長などはチャモロ人が多いということをお聞きすることが出来た。その中で、イノウエ先生がグアム大学で教授として活躍しているという現状は、日本人の真面目さからではないかと考えられ、日本人の真面目さは誇るべきであると感じた。</p> <p>グアムでは日本とは異なり、専業主婦という考えはあまりなく、男性は日本のように料理や家事ができる女性を求めず共働きが一般的であるという。そのため、教育学部では80%が女性であるということだ。これらの事から、男女共同参画社会のために日本に何が必要であるか考えさせられた。そして今回の経験から、国際社会の中でしっかりと日本人という誇りと、国際的な視野を広げていく必要があることを学ぶことが出来た。</p>	
<p>〔研修後の抱負〕</p> <p>今回初めて海外に行き、他国の方とコミュニケーションをとるためには英語を話せることが必須であると感じた。しかし英語が話せない中でも、ボディランゲージやコミュニティ内での生活習慣に従うことで適応していくことが出来るということを理解することが出来たため、今後どちらの能力も伸ばしていきたいと思った。</p> <p>また今回の研修の中で、電気、ガスおよび水道のない環境で生活をしたが思った以上に適応することが出来たため、今後様々な国の生活習慣を知り、実際に体験し国際的な視野を広げていきたいと思った。</p>	

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長 殿

研修参加者

所 属: 農学研究科・修士課程2年

氏 名: 園田 真一郎

授業科目名	「太平洋島嶼学特論」
研修先(国・地域) 滞在地	ミクロネシア連邦・グアム
研修期間	平成25年9月7日 ~ 9月13日
〔研修を通じて得た成果〕	
<p>チューク州ピス島では島民の方のご好意により島内外で生活および散策する機会を得た。電気・ガス・水道が自由につかえない環境で過ごすことにより、本来の生活基盤を見直すことができた。ミクロネシアの小さな島の現場を目にすることで同じ島国である日本と異なった暮らしや食文化を知ることができた。他にも島内外の植物や海洋生物の生態調査を行った。</p> <p>チューク州ウエノ島では、島を車で周り、観光業の実態調査や海辺の生態調査を行った。観光の主はスキューバダイビングなどであり、お土産売り場も木彫りや貝を用いた飾りなどの種類が豊富であった。しかし、島内の道路は水はけが悪いため所どころ冠水状態にあり、また段差が多く、車内は大きく揺れるため徐行での移動であった。この点は島内の移動に長い時間を要することや、車のタイヤへ負担をかける問題があると考えられる。道路の整備は人々の生活のためだけでなく、観光業を推し進める上で優先して行われるべきだと感じた。また、ミクロネシアの市場調査で島内のスーパーマーケットを回った。店内には輸入物の生活用品や食品が多くみられた。海産物や農作物、花の髪飾りといった島内で生産されたものは道端に出店として売られていた。</p> <p>グアムにおいても車で島を半周し、現地の観光スポットに赴き観光の実態を調査した。また、チャモロビレッジではグアムに古くから伝わるチャモロ文化に関して、ヒモ作りやココナッツミルク搾りなどの実演を交えて学んだ。そこには日本統括時代の建物が残されており、日本との歴史的な関わりについても改めて学ぶことができた。グアム大学では、イノウエ スミス ユキコ先生にグアムの教育現場の現状や日本とグアムの社会の違いなどについてご講義いただいた。質疑応答や意見交換を通してグアムの教育、歴史、文化に関して理解を深めることができた。</p>	
〔研修後の抱負〕	
<p>今回の研修で初めて日本を離れることで、海外からみた日本や太平洋島嶼の現状を知ることができた。今回の経験から国際的な広い視野をもつ良いきっかけとなった。今後、真に求められていることは何か考えながら積極的に行動していきたいと思う。また、グローバル化する現代において英語力が重要であることは分かっていたが、今回の研修で改めて思い知らされた。日本に帰ってくるとどうしても英語に触れる機会が減ってしまうが、今後、自ら積極的に学ぶ姿勢をもって、現場で生きる英語力を習得したい。</p>	